そして彼は、難民となった

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 勝彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24755

「そして彼は、難民となった」

文学部教授　佐々木　勝彦

マタイによる福音書　第二章一三～二三節

13占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」14ヨセフは起きて、夜のうちに幼子と母を連れてエジプトへ去り、15ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

16さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。17こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。

18「ラマで声が聞こえた。
激しく嘆き悲しむ声だ。
ラケルは子供たちのことで泣き、
慰めてもらおうともしない、
子供たちがもういないから。」
19ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、20言った。「起きて、子供と母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」21そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。22しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガラリヤ地方に引きこもり、23ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。

二〇一五年も間もなく終わろうとしています。キリスト教の暦も「アドベント（待降節）」と呼ばれる期間に入り、大学の「クリスマス礼拝」もいよいよ来週にせまりました。しかしまさにこ

のとき、世界では、イスラム過激派によるテロ事件、イスラム国への空爆といった「暴力の無限連鎖」が始まっています。世界平和を守るという「怪しげな大義」のもとに、またもや、軍備拡張競争が熱を帯び、多大な予算が国防費につぎ込まれようとしています。このような状況のなかで、わたしたちはクリスマスをどのように迎えればよいのでしょうか。

今朝、取り上げた聖句には、イエス・キリストの誕生前後のことが記されています。それによると、「クリスマスの喜び」に水を差すような暴力事件が描かれています。その見出しは、「エジプトに避難する」→「ヘロデ、子どもを皆殺しにする」→「エジプトから帰国する」と続きます。ユダヤのベツレヘムに生まれたイエスが、幼児虐殺という暴力事件に巻き込まれ、両親と共に「エジプト」へ逃げて行きます。その後しばらしくして、彼らはパレスチナに戻り、ガリラヤ地方のナザレという町に「引きこもって」います。

この三つの話には、いずれにも、父ヨセフ、母マリア、そして幼子イエス・キリストの遭遇した苦難について、それは預言の成就であったという解説が入っています。それによるとヨセフ一家は、運悪く暴力事件に巻きこまれたのではなく、「神の救いの計画」のなかでそれを経験したの

でした。では、その預言とは一体どんなものだったのでしょうか。

最初の「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」（一五節）という預言は、ホセア一一・一の「まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした」という句から引用されています。この預言は、モーセによる「出エジプト」の事件を想起しています。つまり、神はイスラエルを愛し、奴隷状態にあった彼らを呼び出し、神の選びの民、自由の民とした事実を想起しています。マタイは、奴隷状態から解放するこの神の愛が、今や、「神の子」イエス・キリストのエジプト行きとそこからの帰還により、全世界の民に及んでいる、と言おうとしているのです。

第二の預言は、エレミヤ三一・一五から引用されています。そしてこのすぐ後のエレミヤ一六・一七には、こう記されています。「主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。息子たちは敵の国から帰ってくる。あなたの未来には希望がある」と。ところが、マタイに引用されている一五節は、「ラケルは子供たちのことで泣き、なぐさめてもらおうともしない、子供たちがもういないから」という言葉で結

ばれています。そのためどうしても、ラケルの悲しみは癒されないまま、放置されているかのような印象を受けます。しかしながら、マタイ福音書の最初の聴き手がユダヤ人キリスト者であったことを思い起こすならば、彼らはきっと、その後に続く、「あなたの未来には希望がある」という言葉を思い起こしたにちがいありません。マタイによると、この未来の希望は、この難民状態に置かれた「神の子」イエス・キリストによって実現されるのです。

ここに出てくる「ラケル」は、後に「イスラエル」と呼ばれるようになった「ヤコブ」の妻です。彼女は、その第二子ベニヤミンを出産すると間もなく亡くなり、エルサレムの北八キロのラマに葬られました。やがてラケルは、北王国の祖先の母とみなされるようになり、前七二一年、その北王国がアッシリアによって滅ぼされると、人びとはこの亡国の嘆きをラケルの嘆きとして受けとめました。

しかもここには、さらに二つの痛みと悲しみの記憶が込められています。そのひとつが、エレミヤの体験した南王国滅亡の痛みと嘆きであり、もうひとつが、ヘロデに子供を殺された母親たちの苦痛の叫びです。したがって、耳を澄ませるならば、個々人の痛みと嘆き、そして民族の痛みと呻きの声が聞こえてくるはずです。しかもマタイによると、これらすべてが、今や、イエス・

キリストの誕生と難民としての経験により、喜びに変えられるのです。

第三の「彼はナザレの人と呼ばれる」という預言には、そのままぴったり当てはまる文言がありません。しかしながら、少なくとも新約聖書（例えば、ヨハネ一・四六）を読むと、「ナザレ」という町は蔑視されていたことが分かります。「ナザレ」から救い主メシアが現れる、とは誰も考えていませんでした。したがってマタイによると、救い主は、人びとの期待と異なり、都会の中心ではなく「辺境」に現れるのです。たしかにイエス・キリストの生まれた場所は、宿屋ではなく、馬小屋でした。

すでに登場しながら、まだ紹介していなかった人物は、ヘロデ（前七三年頃―前四年）とその息子アルケラオです。彼らは、イスラエル民族からみると外国人つまり異邦人であり、しかもこの親子は、その性格の残忍さと権力に対する異常な執着心のゆえに、圧政をしいた人物として知られています。ヘロデは自らの権力を確かなものとするために、妻を含めた身内の者六人を、そして三人の息子を容赦なく殺害しています。今日の聖句にも、独裁者の病的猜疑心と暴力志向がリアルに描かれています。イエス・キリストは、この本当に厳しい状況のなかを両親と共に生き

抜いた、とマタイは語るのです。

難民は、時に、食糧難民、経済難民、政治難民、戦争難民、そして環境難民と呼ばれるように、様ざまな事情から生まれます。しかし彼らには、いずれにも、「安全」、「安心」、そして「安眠」がありません。わたしたちのまわりにも、この意味で「難民状態」にあるひとが多いことは、周知の事実です。グローバリズムと格差社会のなかで、子供も、若者も、中高年も、そして高齢者も、苦しんでいます。

イエス・キリストの誕生、それはこの現実のただ中で起こった出来事です。それゆえわたしたちは、クリスマスに差し込む「希望の光」に導かれつつ、世界の難民の苦しみと嘆き、難民状態にある隣人の痛みと嘆きに共感し、今日を、喜びをもって生きることを期待されているのです。